

き酒しても慣行農法の物に比べて、有機米の方はまろやかな感じに仕上がっている。「造り」をやっている中で明確な差が出てきているので、これは今後も大切にしていきたい。慣行農法から環境保全型の農業にしていくことによって、この地域に昔いた生物、白鳥やマガンなどが戻ってきている。環境に優しい農業をしていくことが、子どもたちや未来への恩返しではないが良い環境を残していく手助けになるのではないかと考えている。



撮影：2011.3.12 倉庫の被害状況

NPO

石巻市民の私たちにできることを考えながら。

石巻市

川村 久美 NPO 法人いしのまき環境ネット 理事兼事務局

取材日 2011.5.29

石巻圏域の環境に関わる啓蒙教育と実践活動を通し、自然環境と生活環境が共生する社会を形成することを目的に活動に取り組む。震災後は団体の活動を一時休止し、「東北広域震災NGOセンター」の石巻地区活動拠点として場所を提供するなど個人で支援活動に従事。現在は「石巻市民による石巻復興支援プロジェクト」に携わる。

3月11日 14時46分

3月11日は家にいた。蛇田は海岸線から5kmも離れているが、非常な緊迫感を持った防災無線が入り、「津波がここまで来る、逃げなくちゃ」と思われた。あとで知った事だが、その無線が本当に大変なエリアの人たちには届いていなかった。地震で放送設備がダメになるとはまさかの事態だった。そのため、津波がくることが分からず、窓から見て初めて津波がきていることを知ったという人がたくさんいた。

2日目の晩までは余震がひどかったうえ、門脇町方面に見える赤黒い空とヘリコプターの爆音に不安を掻き立てられながら過ごした。3日目の朝が来て、泥にまみれ、なすすべもなく人々が続々と大通りを歩いているのを見て、大変なことが起きているのだと実感した。

蛇田は無事だという情報があったのか、4日目からたくさんの方が訪れてくれた。安否確認所のような機能を果たせるのではないかと考え活動を始めた。これが復興支援のスタートとなった。仲間や友人の生存を確認するという不安と焦燥の入り混じる活動だったが、生きている姿を見た瞬間は、



この先ずっと忘れ得ない喜びになっている。いしのまき環境ネットとしての組織力を起動できる状態でない、深刻な被災状況だったため、個人として活動している。けれども震災後の支援活動は、いしのまき環境ネットがあったからこそつながりで展開している。

地域で炊き出し

13日には近所の神社で町内の人達が炊き出しをすると集まっていた。この辺りは農家が多いので

材料もみそも井戸水もあり、畑にある野菜で食べることができた。夏祭りをする会場には大きな鍋などもあり、こうした活動がすぐに行える土台があった。これまで、まちづくり団体の皆さんがそれぞれ一生懸命積み重ねてきたものの威力とネットワークと機動力が発揮されていた。

ボランティアの姿

ピーク時はものすごい数のボランティアが入ってきた。自分がどこのチームに所属する者なのかわかるようゼッケンを装着していて、とても目立っていた。目立つことが、「ボランティアさんが来てくれている」「応援されている、頑張らなくちゃ」という活力を住民に与えていた。

交流のある他県の団体から依頼があり、「東北広域震災NGOセンター」の活動拠点として自宅を提供している。ここには4月9日からスタッフ数名とボランティアさんが来てくれている、支援が手薄な遠隔地へと赴き、必要なものを伺い、購入して渡すという支援を行っていた。「必要な物を必要な分だけ必要な場所に届ける」という、一方通行ではなく会話を持ち、信頼を培っていく形の支援を知って刺激になった。

これから

いしのまき環境ネットとしては消臭をテーマのひとつとして活動している。体育館や学校の昇降口などに微生物群の液体を散布し、実績を出している。効果はだいぶあるようで、口コミで少しずつ

申し込みが広がってきている。EM菌はニオイを消す、土壌の改良になるとの評判は以前から高かったもので、出番だと言わんばかりに、要請に対処できるよう体制を整えていた事が功を奏した。石巻は広いので、災害の度合いが本当にいろいろなレベルである。町内会ごとにいろいろな大変なこと、不満、不都合を抱えているがそれを吐き出すところがない。役所に行ってもすぐには対応してくれないという思いを抱いていて、仕方ないと諦めそうな雰囲気もある。けれども、諦めても仕方がなくて何とかするしかない。私たちのような第3者が入って整理することによって、市民の声を行政に届けていく橋渡しをしていけたらなと思っている。



撮影：2011.4.13 石巻市

NPO

【特別編】石巻の住民による対談

石巻から考える復興

石巻市

川村 久美 NPO 法人いしのまき環境ネット 理事兼事務局、相沢 健一、毛利 壮幸 (まさゆき)

取材日 2011.5.29

川村さん宅へ伺った際、「活動休日」にお茶のみに集まっていた皆さんを交えてさまざまなお話をうかがいました。皆さんの承諾を得て、『3.11 あの時レポート特別編』としてご紹介させていただきます。

【毛利さん】 家が川のそばにあり被災した。ボランティアさんにすぐ入っていただける状況ではなかった。まず家の人が少し整理して、ボランティアさんが機能しはじめたところに、来てほしいと申し込みをして来ていただく日を待つという形だった。通りにはたくさんボランティアさんたちが歩いていたので、おかげで気持ちの部分では孤立感

に陥ることはなかった。不思議な現象で、ある日突然状況が変わったことによる一種の「共同体感情」が生まれていた。皆同じような痛みを受けているから、それだけで仲間というような。これまであいさつしたことのないような3軒隣のおじさんとあいさつや会話が生まれた。物資の配給ではこれまで作られていたコ